

一方、銅製提子を伴わない事例では、新潟県新潟市馬場屋敷遺跡に類例が確認できる（同図3）。詳細は不明であるが、大小各7枚が伏せた状態で一括出土しており（白根市教育委員会1985）、小皿はSX1とまったく同類で、皿の文様構成も近似する。したがって、年代は同じ15世紀後半～16世紀前半と考えられる。さらにもう1つ、著名な福井県福井市一乗谷遺跡の類例をあげておく（同図4）。染付大皿と青磁鉢が入れ子にされ、その脇に、横倒しの状態で染付小皿10枚が重ねられている（岩田隆1997）。小皿の埋納方法は、SX1と同様である。年代は16世紀中頃に比定されている。

以上を要約すると、まず年代は、15世紀前半～16世紀中頃の限られた期間内にまとまる。しかし、今のところ、容器・内容物・埋納方法が完全に一致する例は見当たらない。また、馬場屋敷遺跡の類例から、SX1の染付皿・小皿は、阿賀川経由で搬入された可能性が高いと思われる。

いずれにせよ、全国的に珍しい発見であり、今後の資料増加を待ちたい。

第6節 方形館の構造と麻生館遺跡との比較

次に、今回判明した方形館の構造を整理し、近接する麻生館遺跡との比較を行う。

下高額館跡の構造

（1）概要

【周囲の環境】館の東側に長勝寺、その境内に板碑が認められる。後述するように、同寺院は下高額館を構えた渡邊左京進長勝が、至徳元（1384）年に自らの名を付して建立したという記録が文献史料に残っている。また、現在の下高額集落が南に接し、この景観は館が営まれた頃と基本的には

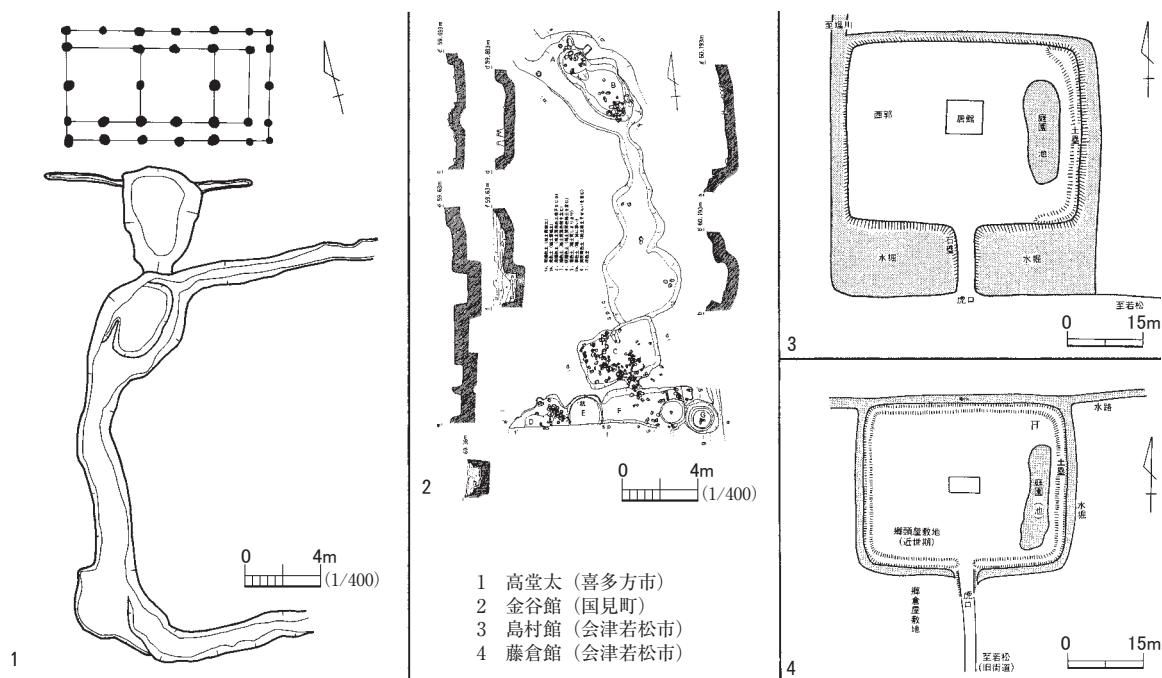


図86 池跡の類例

変わっていないと推定される。つまり、館は「集落と一体的に存在した」(坂井秀弥1997) 可能性が高い。

【平面形・規模】 全体の平面形は、台形状を呈している。この不自然な形態は、自然地形に規制されたものと考えられる。現時点では、北辺約70m、東辺約60m、南辺約105m、東辺約57m、平面積5,000m²の規模が復元できる。

【堀・土壘】 館の周囲には断面逆台形の箱堀が巡り、北辺東半部では、上幅5.5m、下幅2.5m、検出面からの深さ1.5mの規模が判明している。また、崩落土の様子から、堀の内側には低い土壘が併走していたと推定され、現地形の観察でも東辺南側に高まりとして残っている。

(2) 内部施設

【出入り口】 まだ検出されていない。しかし今回の所見から、SD 8・16が途切れる位置周辺に、北・南出入り口の存在が想定される。仮にその推測が正しければ、南出入り口の位置は、南辺中央にあたることになる。どちらも3次調査以降で、確定するはずである。

【施設配置】 基本配置が固定化されている。主殿は、北辺ぎわで3時期に変遷し、西側に東西棟、南側に正方形基調の建物が直列配置される。北辺ぎわの東西棟は、堀の蛇行に合わせて軸線をずらしている(図84)。また西半部には南北棟が多く、さらに外側には井戸跡の集中がみられる。主殿前面～東側には、池を伴う庭園が営まれ(館Ⅱ～Ⅲ期)、県内の他の方形館跡にも類例が認められる(図86)。とくに金谷館跡は、土坑状の池が2基連結し、さらに外側へ水が流れ出る点で、基本構造の一致が指摘できる(福島県教育委員会1980)。

【内部空間の分割】 館Ⅰ期は、深い区画溝で、内部空間が複数のブロックに分割されている。同Ⅱ期は、この規制が弱まる。

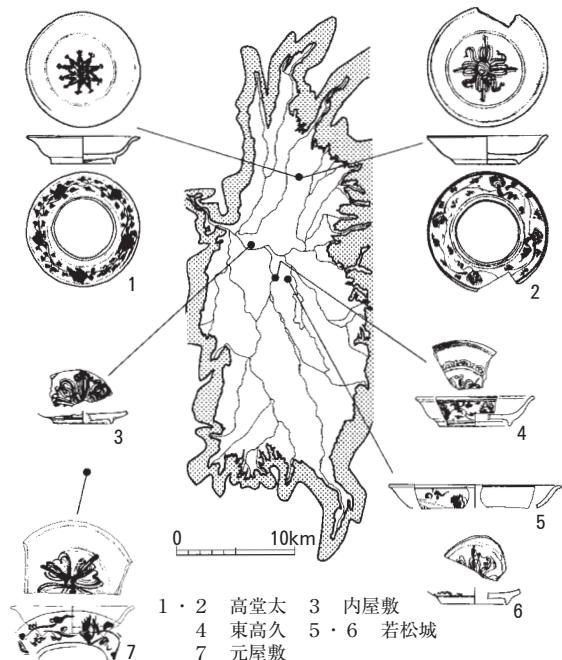


図87 染付皿の類例分布

【主殿の変遷】 身舎面積はほとんど変更せず、平面形と付属施設を変化させることで、格式を高めている(図88右下)。

【存続期間】 14世紀後半～17世紀初頭の、南北朝期～織豊期に存続したと考えられる。

【遺物の質・量】 国産陶磁器・貿易陶磁器の量に、比較的恵まれている。越前焼大甕は、会津地方で初の確実な出土例であり、地鎮遺構に伴った景德鎮系染付皿は、5遺跡目の確認例となる(図87)。また、城館跡に伴うかわらけが1点も確認できないのは、特徴的であると言える。

麻生館遺跡との比較

麻生館遺跡は、本遺跡の南約3.5kmという近

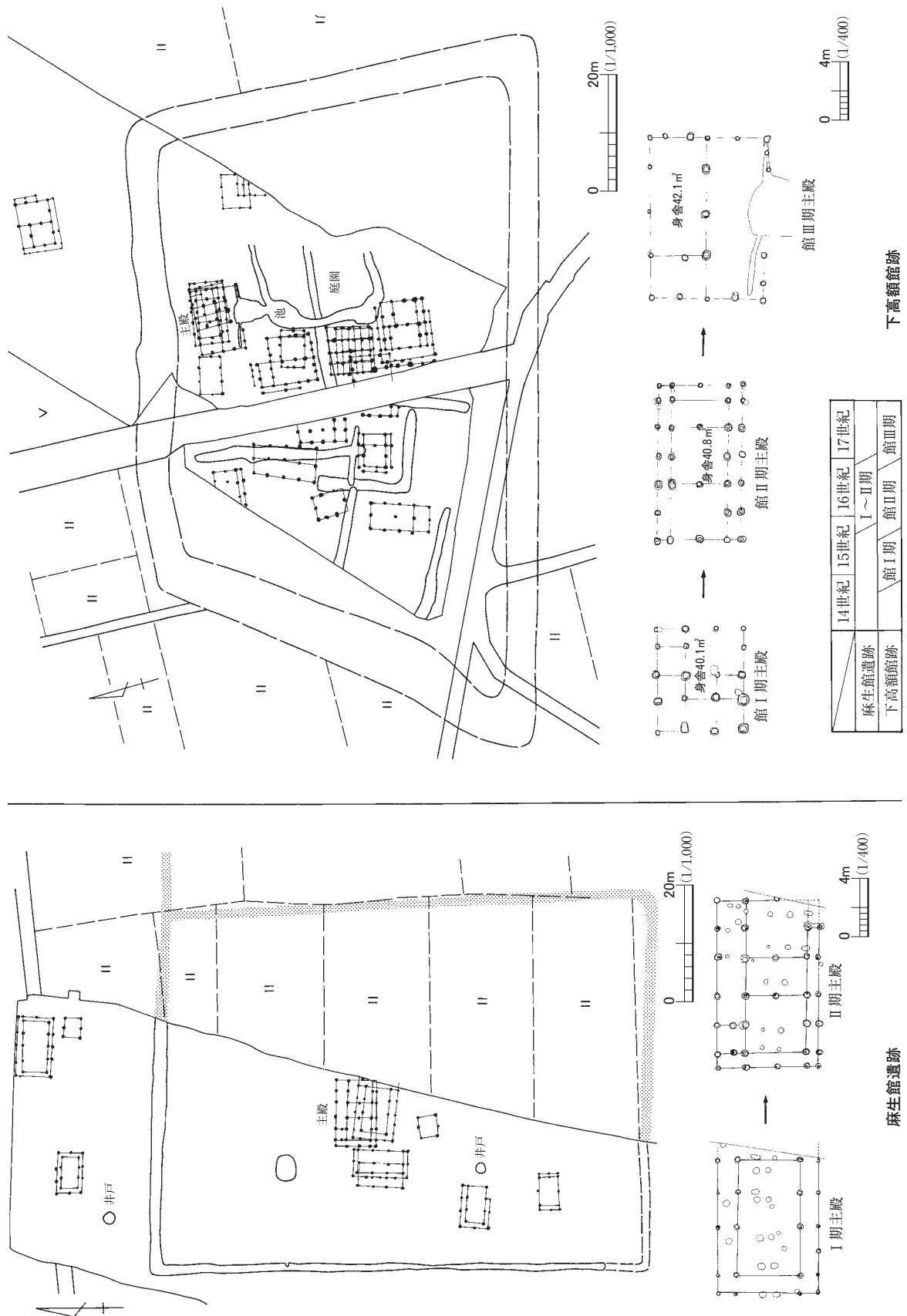


図88 麻生館遺跡・下高額館跡比較

距離に所在する。会津地方では、全体構造と遺構変遷が判明している数少ない方形館跡の1つであり（（財）福島県文化振興事業団2002），下高額館跡とは、一定の併存期間がみられる（麻生館I～II期：下高額館II～III期）。ここでは、その間を対象に相違点を要約する（図88）。

- A) 平面形に違いがみられ（縦長長方形－横長台形），面積は近似している（5,300m²－5,000m²）。堀の幅・深さは、下高額館跡の方がしっかりととしていて土塁を伴い、防御的性格が強い。
- B) 麻生館遺跡は、主殿がほぼ中央にあり北半部が空閑地なのに対し、下高額館跡は、主殿を含み堀・土塁の手前まで建物配置が行われる。また麻生館遺跡は、主殿の西・南側に直列の建物配置が行われていない。
- C) 麻生館遺跡は、主殿に南面して池が設けられず、広い空閑地になっている。しかし、報告書ではここに庭園が営まれていたと推定されており、東側未調査区に池の存在した可能性も考えられる。その場合、両者は類似した構造となる。
- D) 麻生館II期・下高額館II期の主殿は、平面形・構造が比較的近似する。また、堀外部に建物配置が行われる点も一致している。

以上から両館跡は、全体規模、主殿の平面形・構造、堀の外部に建物配置が行われる点が類似する一方で、内部の建物配置にはかなり違いが認められた。また麻生館遺跡は、遺物の量が極端に少ない。それらが何に起因するものなのか、今後の課題である。

第7節 文献史料と発掘調査成果の整合性

下高額館跡には、造営年代・城主名の記録された文献史料が残っているが、その信憑性を、疑問視する向きもあった。次に、発掘調査成果との整合性をみていきたい。

文献史料にあらわれた下高額館跡

下高額館跡には、以下の関連記録が認められる。

- A：『新編会津風土記』 至徳年間（1384～1387），耶麻郡十二箇村を領有する蘆名氏家臣の渡邊左京進長勝が、同郡下高額村に館を構える。また、至徳元（1384）年には、村内に自らの名を寺号として長勝寺を建立した。
- B：『貞山公治家記録』 天正17（1589）年、葦名氏旧臣の十二村助左右衛門が、伊達政宗から会津北方十二村を安堵された。

補足すると、Aの長勝寺は下高額村に現存し、境内には板碑が残っている。板碑は、年号部分が欠損しているが、至近距離に14世紀後半（IV期：1361～1396）の板碑群がみられ（図89-6～19），それもほぼ同じ頃のものとみられる（柳内壽彦2000）。この年代観は、史料に記録された長勝寺の建立年代（1384）と合致する。

また、Bの「十二村」は、Aの「十二箇村」と同一で、十二村助左右衛門も、下高額村に館を構